2026年4月26日（日）復活節主日礼拝説教

「**主は本当に復活された**」井上隆晶牧師
エゼキエル書1章10～11、26～28節、ルカによる福音書24章36～49節

❶【エゼキエルに現れた神キリスト】

エゼキエルはバビロンの地で、神の現われを見ました。それは大天使ケルビムに担がれている神の姿でした。ケルビムが最初に出て来るのは創世記3章です。「**こうしてエデンからアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムときらめく剣の炎を置かれた。**」（創世記 3：24）聖書を開いてすぐのページに出て来るのに、ケルビムとは何なのかほとんどの人は知りません。また幕屋の至聖所に安置されてあった契約の箱の上には一対のケルビムの像があり、垂れ幕にもケルビムが刺繍されていました。イザヤ書では、イザヤが神殿で王座に座しておられる神を見た時に現れます。「**上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。**」（イザヤ6：2）聖書を読むと、ケルビムもセラフィムも神様の近くにいる天使だという事が分かります。エゼキエル書では、もっと詳しく描かれていて、ケルビムは四つの顔と四つの翼を持ち、燃える炎のような天使で、たくさんの目がついていました。これはヨハネの黙示録にも出て来ます。
「**第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであった。 この四つの生き物はそれぞれ六つの翼があり、その周りにも内側にも一面に目があった。彼らは昼も夜も絶え間なく言い続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。かつておられ、今もおられ、やがて来られる方。**」（黙示録4：6～8）「やがて来られる」のですから、玉座に座っているのはキリストであるという事が分かります。後に、キリスト教の伝統では、これら四つの顔が四福音書を象徴すると解釈されました。マタイは獅子（王なるキリスト）、マルコは人間（イエスの人間性）、ルカは牛（キリストの犠牲）、ヨハネは鷲（イエスの神性）を現すといわれています。
大祭司や一部の祭司しか見ることのできなかった至聖所にいたケルビムが、今バビロンという異教の地で現れたのです。それは、神は至聖所の中にだけおられるのではなく、全世界が、この被造世界が神の至聖所であることの証でした。この世は神キリストによって創造されました。この世の万物には、神の神性と力と知恵が現れています。（ローマ1：20）この世は神と交わるための道具なのです。どちらにしても、神はエゼキエルにこの異教の地、バビロンも私の聖所であり、私はここにおり、ここで今も働き、支配しているのだと言われたのです。何とすごいことでしょう。教会から外に出た時、歩いている道も、働いている職場も、すべてが神の至聖所なのです。**全地は神の聖所です。神は活動し、あなたのすぐ側におられます。**

キリストはその昔、モーセに燃える茨の火の中で現れ、イザヤには神殿で垂れた衣を着た人の子のような姿で現れ、エゼキエルには大天使に担がれる者として現れ、使徒たちには肉をとったイエス・キリストとして現れました。そして大天使ケルビムにではなく、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという四人の福音書記者に担がれることを喜びとなさいます。**今、人は神を担ぐ者となりました。天使でさえも見ることを怖れ、触れることを怖れた全能のキリストを、人はその目で見、手で触り、担ぐのです。人は天使よりも高められました。そればかりか、キリストは私たちの中に入られて、私と一体になられます。私に神性を与えてご自分と同じものにするためです。私は神性の火に焼かれない者となり、キリストを担ぐ者となったのです。ああ、何と恐るべきことでしょう。何と人間は高められたのでしょう。キリストを正しく畏れ、正しく愛しますように。**

❷【復活の身体の二つの特徴】

さて今日の箇所は、キリストが復活して弟子たちに現れたお話の続きです。クレオパとルカがエマオからエルサレムの教会に戻り、集まってイエス様は生きているという話をしていると、その真ん中にイエス様が立たれ、挨拶をされました。「**こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。**」（36 節）弟子たちは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思いました。するとイエス様は「**なぜ、うろたえるのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしく私だ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある。**」（38～40 節）と言われました。イエス様の復活した体は幽霊ではありません。単なる霊ではなく、体を持っていて、実際に目で見ることができ、手足があって、手で触ることもできました。しかもこの後「**ここに何か食べ物があるか**」（41 節）と言われ、この世の食べ物である焼いた魚を食べられたと言います。**これは不思議な体です。霊のようでありながら触ることが出来、この世の物も食べると言うのです。考えられるのは地上の体と天上の体、人間の性質と神の性質の二つを完全に併せ持っていたということです。**でもこれは何も驚くことではなくて、神が人になったという「受肉」を本気で信じることが出来る人には、十分受け入れられることなのです。キリストは人間性と神性の二つの性質を完全に持っているということです。神性は何ものにも縛られず自由で無限ですが、人間性は限界があります。

●6 世紀の教父マクシモスは「**キリストは鉄として切り、火として焼く**」と語りました。剣を火の中に入れると鉄は真っ赤になり、切りもすれば焼きもするという二つの働きをすることができるようになります。キリストは神性によって一人の娘を蘇らせ、人間性によって娘を支えて起き上がらせます。キリストは神性によってラザロを蘇らせ、人間性によって墓の前で涙を流します。ここでも、キリストは神性をもって扉を通り抜け、人間性によって人に触れられ、魚を食べるのです。し

かもその人間性は神性が浸透した人間性です。それは生前、ただ一度タボル山の上で姿が変容したときに現れました。その神化した肉体は太陽よりも輝き、真っ白になりました。しかし彼はすぐにその栄光の姿を弟子たちに隠しました。キリストはその神化した人間性の輝きをあえて隠したように感じられるのです。

イエス様が弟子たちに復活の姿を現わしたのは、弟子たちがやがてもらうことになる「栄光の姿」を見せ、勇気と希望を与えて宣教に遣わすためでした。**私は自分の身体がイエス様と同じような体になるという希望を抱いています。**それは聖なる使徒たちも語っていることです。「**神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。**」（ローマ 8：29）、「**私たちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れる時、御子に似た者になるということを知っています。**」（Ｉヨハネ３：2）

この世は悲しみと、苦しみで満ちています。それはこの世のすべての人間に罪があるからです。その罪によって病気や災害や戦争や憎しみ、争いが起こってくるのです。自分自身を振り返ってみても私の中に老いと病気と罪が満ちていて、それから自由になれません。やがて私は死ぬのです。それが人生のすべてだったら何という不幸でしょうか。しかし来るべき世界では、私は罪から自由になり、死はなく常に命に溢れ、病も老いもなく完全な者になるでしょう。

●逢坂元吉郎牧師が北海道のトラピスト修道院を訪問した時のことを書いています。「実に彼らの身体は、この世と来世との二重になっているのである。院長と私は語り合ったことである。院長は、自分は歯が悪いと言われるので、私も悪いと言えば、来世ではもっと強い歯を貰うことでしょうと言われる。…修道者たちが大いに歌うので、そのことを私が言うと、院長は天国ではもっと歌いましょう、と言われるのであった。すなわち、彼らは何事を語っても、その裏打ちをなしているのはかの国であって、この世のことではない。…この世の生活の裏にかの世があり、かの世の生活をこの世に覚えてゆく―、これが彼らの生活であり、この生活の中に昔ながらの典型があることに、私は気がついて次第である。」

すべての人間は甦るために、この世に生まれて来たのです。しかし人間の力だけでは甦ることは出来ません。**地に降りてこられ人となった神、死から復活した神キリストに結ばれて、初めて人は甦ることができるのです。**福音は単なる知識ではなく、キリストを信じるだけではなく、死んでゆく私の中に、死なないキリストが実体として出来上がる体験なのです。人の中にキリストが入ってきて、人を神化させ、だんだんと主と同じ形に変化させてゆくのです。これこそキリスト教の神秘です。思うにこの聖体、聖血に与るほどの楽しみはなく、喜びはありません。死なない体に変容することが楽しみです。これを希望としてこの世を過ごしたいと思います。